

「コロナ禍が我々に問いかけたもの」

2023年10月

中高校長 森野 章二

それどころか、体の中でほかよりも弱く見える部分が、かえって必要なのです。

(コリントの信徒への手紙一12章22節)

イエスはこれを聞いて言われた。「医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。

わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。」

(マルコによる福音書2章17節)

今年度5月8日より、行政によるそれまでのコロナ感染症対策が大きく変更され、様々な制限が緩和され始めました。学内でも対面での活動が大幅に再開され、諸行事も「コロナ禍」前の形に戻って行きつつあります。それに伴い、学内に活気が取り戻され、生徒の皆さんの元気な声、明るい笑顔が見られるようになりました。たいへん嬉しい気持ちで眺めています。

そのような様子を目にしながらか、あの「コロナ禍」とコロナ対策はいったい何だったのだろう、と思いを巡らします。単なる嫌な思い出、さっさと忘れてしまいたい忌むべき記憶で片付けてしまっていて良いのだろうか、と。

「コロナ禍」で命を失った多くの方々、悲しみに暮れたご家族、仕事を失い、人生を狂わされた人たち、大切な青春時代の日々を外出自粛と孤独の中に過ごすならなかった学生、生徒たち。そして、今もなお感染拡大が継続している中、現在進行形で感染症やその後遺症で苦しんでいる多くの人たち。それらの人たちのことを考える時、軽率なことを口にしてはならないと思います。そのことは重々承知の上で、敢えて問います。あの「コロナ禍」とコロナ対策は何だったのでしょうか。

あのような生活、経験は二度とたくありません。しかし、誤解を恐れずに表現すると、何もかも「コロナ禍」前に戻して、ひたすら元通りの生活を追い求めていくことが、果たしてあるべき姿なのだろうか、とも思います。

「コロナ禍」で、人の集まりを避けることが求められ、全国で多くのキリスト教会が、それまで大切にしていた日曜日の礼拝に集まることを自粛しました。そして、会堂に集まることが叶わない状況下、オンラインで礼拝を持つ教会が増えて行きました。対面で集まることはできないが、何とか礼拝だけは守りたい、という思いから出てきたものです。すると、思いがけないことが多くの教会で起こったそうです。心身の不調や家庭の事情等で、長年礼拝に出席できていなかった人たち、教会の敷居が高いと感じていた人たちから、感謝の声が届いたのです。「数年ぶりで教会の礼拝に参加できました。感謝です。」「ずっと礼拝に出席したいと願いながらも行けなかった私ですが、今回オンラインの礼拝に参加できて本当に嬉しかったです。」「礼拝に出席していない『罪悪感』から解放された思いです。」

(次ページに続く)

教会の心ある人たちは気付きました。私たちは、自分たちが喜んで礼拝に出席できていることに満足して、出席したいのにできない人たちがいる、罪悪感を抱いている人さえいる、ということ意識しないうえに。教会の礼拝は、日曜日の朝、教会に来ることのできる「強い」人たち、「立派な信者」だけのものになっていた。様々な事情で礼拝に来ることのできない「弱い」人たち、「立派でない信者」のことを結果として締め出すことになっていたのではないかと。

このような気づきが一つの要因となったのでしょうか。多くの教会では、対面での礼拝が再開された後も、オンラインでの礼拝を並行して実施しています。

「コロナ禍」にも何か良いことはあった、益になることはあった、というような単純なことを言いたいわけではありません。「コロナ禍」前には、礼拝は人が集まって行うもの、集まらなければ礼拝はできない、というのが常識でした。しかし、その常識がコロナによって強制的に再考を余儀なくされ、集まらなくても礼拝をする方法はあるのだ、という新たな常識が生まれました。そして、古い常識の中で埋もれさせられ、無視されていた「弱い」人たちの存在がクローズアップされて、「強い」人たちの独りよがり反省を迫られたのです。コロナ対応が図らずも「弱い」人たちに礼拝参加の道を開くこととなりました。それを「アフターコロナ」の名のもとに、以前の状態に戻してしまうことは適切ではない、いや、むしろ損失だ、ということを知りたいのです。聖書は、「**ほかよりも弱く見える部分が、かえって必要なのです**」と語ります。「強い」人たち中心の社会は、いずれほころびが出て来ます。イエスキリストは、「**医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである**」と語られました。教会は本来、「弱い」人たちのためにこそ存在するべき場所と言えるかもしれません。

教会での出来事を一例として挙げましたが、この事実は教会だけに留まらないのではないのでしょうか。同じことが他の多くの事例にも当てはまるのではないかと、思うのです。果たして、何もかもを元に戻すことが適切なのだろうか。そんな問いかけを常に持ちつつ、「アフターコロナ」の在り方を模索すべきではないか、と思うのです。社会にも学校にも活気が戻ってきた今の状況に水を差すつもりは毛頭ありません。ただ、「何もかも元通りに、それこそが善」という圧倒的なスローガンに、ある種の危険性を感じ、「コロナ禍」が私たちに問いかけたものを再考する必要があるのではないかと、考える次第です。